

■タイトル : 緑色閃光 (第一部)

■企画動機

「なるろう」系と呼ばれているジャンルにおける要素 (異世界転生、ゲーム的演出、展開) を昇華させ、難解とされる作品を簡単に、かつ重厚さを、ロボット物としての完成度を上げていく物語として書いていく。

) 現状について。

(強み、弱み)

キャラクターを強く出しすぎているあまり、世界観やストーリー性が剥離している状態にある。  
まずストーリーという骨組みを作り上げ、肉付けして噛み合わせる事で全てがかち合った状態にする。  
また、難解さを伴う文章により、言いたいことは分かるが理解できない状況が多々ある。  
これらを見直し、誰にでもわかりやすい平坦な言葉のみで構成する。

■時代背景、ジャンル : 遠未来

■対象 : (誰に)

子供から大人まで。

■コンセプト (何をどうするのか、他の作品と何が違うのか。目指す方向性)

) 平坦な言葉とシンプルなストーリーにより、誰にでもわかりやすくする。

) 作品全体の設定をまとめ、カラーを統一することで重厚さを強め、何が欠けても成立しないほどに深く没入できる作品にする。

) ロボット物ならではの派手さ、格好よさを動きを中心に表現しセリフを始めとした安直な表現を避ける。

■スケジュール。計画 (容量、工数、日数など)

全3冊分 (原稿用紙1000~1200枚程度)。

全体的に3~4年程度のスパンとする。

1話を区切って同時に公開する。(今までは1話を区切り1週ごとに公開している)

反応を見るために投稿サイトの変更。

■コスト (日数、手間)

企画立案~設定確定 (仕様書の完全作成完了) まで半年~1年程度。

本文は1話あたり2か月程度とする。

大まかにはフローを参考に。

■テーマ (主題)

) 命を存続させるにはどうすればいいのか。

(理由) 世界の消滅という状況にあり、維持を行うに必要な特異点もいつ消えるか分からない。維持を誰に行わせ、誰が計画を実行して引き継いでいくのか。

(結果) 引き継ぐべき者を適切に選び、引き継がせて進めていく。未来は今の人間が作っていく。

■ストーリー概要

平行世界はサブストリームと呼ばれる、特異点のない世界であり、特異点のある世界と統合され、消滅の危機にあった。現に一部を除き世界は消滅した。

30年前、突如現れた2機のロボットが墜落した。

2機を調査した結果、異界から現れた特異点だと判明する。

これにより世界は消滅せず、そのままとなったがいつ消滅するか、その機体を回収する勢力が現れるか分からない状況だったため、国家より上位の組織である複合体を作り対処することになった。

リウエに物資を輸送していたマルスは荷物を清算し、上司のハンスを介して封印の地へ向かうように言う。

マルスは疑念を感じるも、封印の地へ向かっていく。

ハンスは婚約者のルシエラと共に向かい、マルスを酷評しながら話をする。

封印の地に向かう最中、マルスはリウエが襲撃されたと知らせを受ける。

動じずに合流するよう、複合体から指示が出るがマルスは向かう事無く、切り返してリウエへ向かう。

リウエに突如マイスと呼ばれる人型兵器が現れ、次々と施設を破壊していった。駐留していた部隊は対処しようにも戦力差があまりにも激しすぎ、撃破されていく。ハンスも応戦するが余りの差になす術もない。

制圧をほとんど終えた部隊は残り、後片づけをして去っていく。

その姿は不気味そのものだった。

暫くして、マルスが駆けつけてくる。

徹底した破壊工作の状況を取りつつ戦闘で苦戦した末、敵機はデータを奪って撤退し、部品が回収される。

ルシエラはハンスらの死を確認すると駐留しなかったマルスを責めるも何も答えずに調査を続ける。

部品の解析の結果、規格化されていない部品と判明する。

そこに封印の地の調査依頼を蹴った理由を求めため、本部への召喚を求められ向かう。

ルシエラは複合体に残り、中立都市の状況を話す。

マルスに封印の地への調査を続行させ、都市の制圧は予想通りだったと話す。

マルスは封印の地へと向かう。

制圧が予想通りの理由を話すと、ルシエラは激昂するがわかっていた事をほじくり返すなどという。

マルスが依頼を付けてでもリウエに向かい、態々調査を行いデータを回収した真意がわかり驚く。

彼女は意思を組んでデータベースを解析する。

制圧と本部の目的とは矛盾がありどう見ても別の目的があると迫る。

複合体は了承し、調査の為に奪還作戦を検討するが、ガルキアは中立を理由に拒絶し、当初の目的を果たしているのではと答えで検討するという。

マルスは出撃し、封印が解除された機体と交戦するもエネルギーを失い取り逃がして帰還する。

合流したマルスが戻り、話を聞くとルシエラと同じ回答をする。

戦闘データからガルキアの領地より来たと答え、明らかな制圧だと答える。

これにより、中立都市の奪還作戦が発令される。

一方、ガルキアは独自にクワンターを募り調査を行う。

奪還作戦の折、交戦の最中血の刻印で封印した天使砲を解除し、残っていた兵器を回収し使用、壊滅する。

ガルキアはこれに抗議したが、当初から決まっていた事であった。

彼らが提出した調査結果もハンス達の交戦データから矛盾が多く、明らかに自作自演だった。

複合体は見切りをつけ、強制捜査の一環として王都への侵攻を決定。

ガルキアは新型機とクワンターで抵抗し、防御を固める。

ルシエラはマルスと共に行くというが、拒否される。

しかし、無理にでも就いていくといい仕方なく後方に置く。

圧倒的な力に屈するも、機転を利かせマルス達は王都に入る。

地下都市にて搭乗者のオリジナル機体とクローンが発見され、マルスもその一人だと認識される。

襲撃した機体は全てここで作られ、そしてマルスも道具の一人だった。

事実を伝えると複合体は知っていたかのように返答する。

全て最初から知っていた事であったが、手段がまずかったのだという。

マルスも複合体のやり方に苛立つも、全てを救うためにそうしているに過ぎないと察して従う。

王宮に入り、王女に会う。  
全ての理由が民を救うためと吐露するも、実際には自分の地位を安定化させるための手段に過ぎないと知る。  
そして、自分が駒でしかないこと知って力を失った所でルシエラにより逮捕される。  
事態は解決したが、まだ特異点である機体の行方について解決していない。  
整備と報酬を受け取ると、封じられた機体の行方を捜索する部隊に合流し、追撃に向かう。

## ■場所一覧。

地名：ニウテラ。  
地理：40Km圏内の円状に収まる計画的に作られた都市。強国の国境のはざまにある。  
文化、宗教等習わし：宗教関連はばらばらで出身者は区域ごと計画的に区分けられ、完全に独立したコミュニティを形成している。中央に各コミュニティを総括する政治ブロックが存在する。各区域は出身者ごとに固まっているため、生活が異なる。重工業を中心に成立しており、設立の経緯から各国家間の取引は余りないが食料の生産が行えない土地柄、生活物資の取引はクワンターを通して定期的に行われている。各ブロック毎にクワンターが配備されているが、条約により街には12機までしか表に出ていない。(予備がいる為、全体の配備数は36機程度である)全て複合体直轄で国家に属していない「傭兵」のカテゴリになる。  
過去：25年前に発動した兵器の開発計画に乗っ取り、技術者を各国家より集めて住まわせた。人員は全て移民で30〜40万人程度。政は独立しているが、兵器の開発をメインとしているため管轄は複合体が行っているが、地理的な理由でガルキアの租借地となっている。故にガルキアの独立区としての側面がある。移民が多い特性上、追放を受けた人間の中継地として存在しているが、逆にここに住む人間はクワンターと複合体の関係者を除いて街の外に出られない。兵器開発終了後、機密保持のため直ちに消滅するように契約している為である。人員も例外ではなく、代わりに周辺の身元や身分の保証は行われている。  
現在：兵器開発がほぼ完了し、最終調整のみとなっている。生活物資はクワンターを通して取引されている。開発された兵器は血の刻印により封印され、特定の条件、人間でなければ開けられず使用も出来ないようになっている。しかし誰かが血の刻印を持つか分かっていない。これは特定されるとその人間を買収しかねないという表向きの理由がある。実際の理由は自らを保護するためであり、彼ら自身が「自らを破壊するとき」が来た時に直接その人間に伝えて破壊するようにするためである。最後は自らの手で選ぶというわけである。

未来：強国の1つ、ガルキア連邦のマイスをガルキア大使館内で製造、稼働させて制圧する。  
複合体はこれを「時が来たので兵器を回収して消去する」という取り決めに従っていると判断し、無視を決め込んだが実際には駐留しているクワンターすらも壊滅させるなど、工場等の技術を独占し、兵器の量産をもって自らの権力を拡大させるのが目的である。(故に無差別攻撃をせず、血の刻印による解除も行っていない。必要な箇所を確実に残している)  
その事に気づいたマルスは封印の地に向かってる最中で複合体の忠告を引き返し、リウエを壊滅させて避難している人間を保護して駐留していたハンサルのデータを回収する。  
(派遣されたガルキアのクワンターの勧告により謎の機体は撤退し、調査名目でガルキアが立ち入っている)  
複合体は回収したデータから、兵器の回収が目的ではないと判断、ガルキアの提出した証拠を蹴り調査目的に奪還作戦が発動する。

作戦中にリウエの民はマルスに血の刻印を解除するよう要請、時が来たとしてマルスは血の刻印を解除して回収した兵器である天使砲を使用、完全に消滅する。

(各項目200字以内)

施設：兵器開発工場。各区域の役場。複合体拠点。各入り口の門。各大使館と敷地。ターミナル、入退場ゲート。  
構造：地下区域に血の刻印により兵器が封じられている。また大使館は独立しており一切町の人間に関わらずに外交ができるようになっている。町の人間は完全に外の人間と接触できないようになっている。(但し物資のやり取りをする等、密接にかかわるクワンターは除く)  
政治システム：各居住区代表による合議制が取られている。各住民は超兵器の機密保持のため、兵器の回収後街ごと消滅する事になっている。住民は全員知っている上で居住、契約している。その代わりに外にいる遺族には生涯にわたる身分と経済的な補償が約束されている。(但し消滅が確認されない限り無効である)  
各国家の介入は少ない。自衛軍はなく、傭兵により確保している。これは独立区で国家の所属による兵が確保できない為。非常に厳しく、内部の人間は外の関係者を除き一切外に出られない。  
関連する地、人物：マルス、ハンズ、ルシエラ。ナグロツサ(近接都市、ガルキア側)エデュケム(近接都市、スブレア側)  
名物、特徴：各区域に工場があり、部品の開発政策を行っている。複合体には公開していないが大使館にはマイスが配備され、地下のトンネルを経由して機体の横流しが行われている。通貨は独自通貨のマリーだが、各国家の通貨は使用出来る。(但し手数料がかかる上、物流が発展していないので物価は高い)換金所も多い。  
言葉の意味はポルトガル語で「中立」。  
モチーフ：ブラジル、ポルトアレグレ。

地名：ユマボウンチ。

地理：リウエよりスブレア側に離れた場所にある都市。

文化、宗教等習わし：リウエとの物資取引が行われている都市で、物流の要となっている。市場が多いが治安に不安がある。光と闇がはっきりしている。治安が悪い区域では死が日常茶飯事なので、弔いに関する細かい規定は特になく簡素に葬儀が行われる。

過去：中立都市の中継地になる前は国境の要所となっていた。物資のチェックを行っていると同時に、市場として発展してきた。中立都市の開発と共に食糧から工業の取引が行われるようになり、次第に発展してきた。

現在：発展してきたものの、町自体は何も生産していない。これは流通都市であるためで、一般的に宿泊所や駅、市場などの商業区域が中心となっている。一方で急速に発展しすぎたためについてこれなくなっている現状があり、周辺区域の治安悪化が懸念されている。縄張り争いからくる抗争が絶えない。リウエとのやり取りを行う上で重要な拠点で、物資搬入はここが一番確実でクワンターとの取引も多い。

未来：リウエ壊滅により国境は封鎖された。故に流通は滞り急速に衰えることになる。縄張り争いは激化し、治安はより悪化していくことになる。

(各項目200字以内)

施設：宿泊施設。各種治安維持組織(警察、消防署など)、市場。列車。複合体整備施設。輸送ターミナル。

構造：宿泊施設等の明るい面と治安の良い区が中央やターミナル周辺に集中する一方、周辺は自警なくして入れない貧困区域が存在する。

政治システム：中央を中心に統制を取っているが、端にまで行き届かずスラム街周辺では縄張り争いが行われている。しかしながら、ある程度均衡が保たれていて、立ち入りに慣れた人間からすれば治安は比較的安定していると感じる。

ポルトガル語で「橋渡し」の意。

関連する地、人物：なし。

名物、特徴：輸送ターミナルが多重に存在し、常時稼働している。

使用するロケーション：リウエから向かう時の中継地点。回収した機体の部品を本部へ輸送するよう促す。自分たちは首都へ向かう。リウエ奪還作戦にて配備を行う。

モチーフ：ブラジル、バカリア。

地名：聖都ニモ＝モントジュニアス。

地理：標高が高い場所にある。計画都市で緻密な建造物と交通網を持つ。各議会をはじめとする施設が所狭しと並んでいる。

文化、宗教等習わし：スブレア首都となっており、議会や大使館など設備が充実している。細かい設備は十局内にあるが、これは急速に行われた整備計画の影響である。スブレア最大の都市であり人口密度が高い。立憲君主制で、民主制だが王は拒否権と外交

の立案、決定権を持つ。軍と複合体との関係も密接で、各組織の練度は高い。

過去：王政が敷かれていたが革命により王政を廃止し立憲君主制へと移行した。その際議会や公文書の公開など、民に向けてのデータ公開資料が膨大になったこと、複合体への設備拡張の必要から首都整備計画が建てられ了承。民の意見を踏まえた上でできる限り追い出さない方針で区画整理が行われた。そのため、区画はまばらとなってしまうと、住居区域の中に大使館や公文書館が存在する斑模様都市となった。但し政治機能の中核のみとなっており、経済機能の中心は別の都市に移転している。

現在：政治機能の中心となっており、政府関係者が多く訪れる。一方でかつての都市の形相もまばらにあり、古いものと新しいものが混在する街となっている。王宮は奥にある非常に大きな区域そのものであるが、王の意向により一部が公園として公開されて

いて立ち入りは容易となっている。

未来：ガルキアの女王が逮捕された際、こちらに護送される。複合体に睨まれており良好な関係になるとは言い切れない。

(各項目200字以内)

施設：大使館、複合体拠点。議会。王宮。政府機関。公文書館。

構造：住居区域と大使館等の施設がまたらになっている。全体的に高層ビルが立ち並ぶ区域とそうでない区域とがあるが、経済的な差は余りなくある程度バランスを取っている。

政治システム：立憲君主制で、王族はいて議員にも特権がある仕事内容は平民出身の議員と同じで、一般市民からすれば名誉職に近い。各県の代表者と複合体の関係者と王族のうち選ばれた人物が集う上院と、各議員が推薦した人間のうち、選挙で当選した下院の2つが存在する。

言葉はポルトガル語で「山間の巣」の意。

関連する地、人物：王、複合体幹部。複合体総督府。

名物、特徴：計画都市であるが、経済の都市ではないので明るさはない。法にも厳しく人より警察の数が多いと言われているほど。

使用するロケーション：複合体施設。

モチーフ：ブラジル、ブラジリア。

地名：複合体総督府フォルタジラス。

地理：重工業地帯で資源の採掘、輸送からマイスの生産までを一括して行っている。山の中にあり天然の要塞の形相を見せている。公害がひどいとされ住居区と完全に隔離されている。外の人間が宿泊するのは、公害や環境の悪さを理由にお勧めできないとされる。関係者以外の立ち入りはゲートにより不可能となっている。

また、外部にはゲートと一体化した地下区域があり、そこでマイスやフロートは固定を義務付けられる。よって、内部には許可された物資以外は直接持ち込めない構造になっている。

文化、宗教等習わし：巨大な工場群と道場を複数持ち、非常に高い練度を持つ。法律より規律を重視し、徹底した管理を行っている。警察組織は少ないが各個人単位で自衛、武装している為に治安は守られている。融通の効かない人間が多い。

過去：27年前の世界統一見解を決める会議により組織された巨大な超国家組織の本部。大国であり、歴史の古いスプレアが公害を理由に首都移転した後、空いた土地を利用した。

現在：マイスの製造、整備工場と傭兵のクエンターの詰め所、住居エリアを取り囲み総督府のビルディングがそびえたつ。内部は関係者以外立ち入りができない領域であり、区域そのものが要塞と化している。

未来：自衛軍の侵攻により交戦、撤退にまで追い込まれ一部が壊滅する。

(各項目200字以内)

施設：総督府管理区域。住居区域。クエンター詰め所。

構造：中央に要塞状の総督府があり、詰め所がある。

政治システム：独立区であり、実質的な管理は市長が行う。市議会議員を含め関係者は一切政治に寄与しない。リウエを上回る中立区域となる。これは各国家の決定より複合体の決定が優先される(複合体の設立目的は世界の消失を阻止するための調査、観測の為に先兵の育成と部隊運用、目的の達成にあり国家群の争いに直接関与しない)のである。

複合体の関係者は機密保持と身の安全を確保する為に原則非公開となっており、更には人権保護から身分を示すナンバーも常に変動する。故に隣にいる人が複合体の管理者であるケースもありうる。よって誰が誰の位で何の仕事をしているのかは一切わかっていない。

わかっているのはクエンターやマイスの管理を行う、比較的近い人間だけであり、この辺は外部スタッフなので変動はない。

言葉はポルトガル語で「鋼鉄の要塞」の意。

関連する地、人物：1部少女、1部主人公。複合体市長。

名物、特徴：重工業地帯であるため、食えればいいというものばかりで料理の質が悪い。但し原材料は無菌の工場で作られるため味気ないが安全で信頼性も高い。調味料は化学薬品なので雑味がない分味気ないので好みが分かれる。物資の搬入も検閲が厳しい関係でさほど行われない。クエンターが輸送する新鮮な食糧が頼りである。

使用するロケーション：

モチーフ：サンタクルズ。

地名：研究施都市、シェイクジブラス。

地理：王都ゼルファン内部にある都市群。研究施設そのものが都市として発展している。

文化、宗教等習わし：医療を含めた基礎科学は世界最高水準とされている。製薬会社等の化学メーカーが多く集う。農業成果物の生産性はなく、物資の搬送と取引により経済が成立する。ガルキアの主要産業の一つとしての医療、化学製品の開発を支えていると言える。しかし、ガルキアの国家の指針により変更されることも多い。

過去：スプレアと比較的距離が近いこともあり貿易の為に化学工場が立ち並ぶ。

スプレアの工場区域が総督府になった為にスプレ側の工業製品の輸送が遠のく。これにより貿易取引を目的とする工場の重要性が高まり、工業製品ではなく別の製品である化学製品の開発生産が主流となる。国家が中心として勧誘を行った結果、世界最大の研究、開発を行う都市となる。同時にガルキアの意向によりリウエから横流しした部品の組み立てを行い、独自の兵器開発を行うことになる。

現在：横流しが発覚し、更にリウエで回収された機体のパーツの照合から、ガルキアが独自開発した兵器だと判明する。責任追及を行うもガルキアは拒否。これにより複合体の侵攻が行われる。ガルキアはクロウン部隊と傭兵を使い交戦。激しい戦闘の末クロウン兵は壊滅し明け渡しを余儀なくされる。

未来：明け渡しの後調査が行われ、独自の兵器とクロウン兵の研究形跡を回収する。これにより主人公もクロウン兵の一人と判明する。

(各項目200字以内)

施設：クロウン兵開発、研究棟。製薬会社施設群。兵器開発工場。輸送地下空港ターミナル。

構造：製薬会社軍が表に出ている。地下は巨大な空洞がありもう一つの都市がある。クロウン兵や兵器の開発、練度の調整を行う施設となっている。

政治システム：ガルキアの方針に従う分には経済を安定させている。そのため製薬会社は表向きは従っている。再生計画自体は複合体も把握していた(というより複合体も絡んでいた)が、拡散を求めた複合体と先鋭化を求めたガルキア側と対立、袂を分かた。以後は複合体はクエンターという組織による世界秩序の維持を行い、ガルキアはクロウン兵と独自開発した高性能機による制御、世界の維持を行おうとした。同じ答えに行きついたのだが、問題はその為の手段で、さらなる発展のため技術を手に入れるために行ったリウエ制圧が規約に反する行為だったため、手痛い代償を支払う羽目になる。

地名はポルトガル語で「穴だらけ」の意。

関連する地、人物：ガルキア女王、1部主人公。製薬会社社員。

名物、特徴：製薬、実験棟が多く非常に建物の密度が多い。地下都市が存在し、空港まである。

使用するロケーション：表。地下都市。地下都市内研究施設。

モチーフ：コンコルディア。

地名：王都ロンジカステル。

地理：イムスクより西にある都市で、ガルキアの首都。政府機関が周辺に展開している。

貴族以外の居住が許されない王宮区域があり、都市が周辺に展開する。中国の古代城に似た構成になっている。

文化、宗教等習わし：貴族が代々に渡り治めている為、格差が非常に激しく身分感の対立も激しい。中心の川を通して冠婚葬祭が行われている文化があるのは共通しているが、あまりにも装飾に差がありすぎる。

過去：元々は宗教都市として発展してきたが、政治と宗教が一体化し次第に司祭が貴族となり重曲をそのまま乗っ取る形で成立した。政治中枢は全て王族が占めるようになり、過剰なエリート主義が各県を収めるまでに拡大した。街の人間は次第に格差を受け入れ、然るべき道に落ち着く形で街が成立した。

現在：王女が即位した後、摂政により政治が行われている。合議制であるが表向きでしかない。余りに巨大化した為に複合体への過剰な納付金や制約から抜け出すため、完全な自立を求めて複合体へ反旗を向ける。

未来：傭兵と軍との戦いの結果、王女の逮捕により主体性を持たない貴族は事実上権利を失う。また、貴族の住居区域は全て壊滅し平民がなだれ込み混ざっていく。混乱を避けるためスプレアの管轄に入るも、王女の釈放により再び政治券を取り戻す。

(各項目200字以内)

施設：貴族院住居地区、平民住居地区。兵器開発工場。血の刻印（オリジナルの機体の一部を封じている）  
構造：地下に兵器開発工場。オリジナルの死体と遺伝子パターン、機体の一部が保管されている血の刻印。王族が住む王宮と、リウエすら見られる王宮『時の柱』が貴族の住居区域の先に存在する。  
政治システム：絶対王政を取り、王族以外は政治にかかわらない。貴族は従う形で抗無に従事している。平民は住居区の外にいて、従う形で強いられる。彼らは外に出ることは許さず、施設に関わることもない。更にターミナルもなく傭兵の立ち入る隙間もない。  
地名はボルトガル語で「遙かなる城」の意。

関連する地、人物：1部主人公。王女。貴族。傭兵。  
名物、特徴：平民と貴族の圧倒的な格差。傭兵すら立ち入らせない（表向きの高貴さ）。  
使用するロケーション：王都全体。『時の柱』  
モチーフ ロサリオ

## ■用語一覧

マイス。  
人型大型兵器。  
10m程度で腰部の後ろにコックピットがある。  
装甲と言えるものはなく、そう見えるものは全てエネルギー発生装置とバリア発生装置を複合したものとなる。  
動力源は空気中の水で、燃料電池に変換する。バッテリーはなく全て外燃機関となる。  
材質はチキン質のプラスチックに近い。  
機体は各部位がコンピュータで接続されており、各部位の動きに連動してモーションを取る。  
そのため制御は恐ろしく簡易となる。（昆虫の神経回路と脳を模倣している）  
癖を埋め合わせるため、根底にある記憶で認証を行い調整を自動化する。  
元に行っている記憶が男性の関係から男性のみしか扱えず、女性が扱うと脳に多大な負担から神経の一部が破壊されるなどの影響が残る。  
本来はオリジナルの記憶を保有する者以外扱えないため、メモリーを入れたカードで認証の記憶を欺瞞する事で扱えるようになっていた。  
但し癖は変わっていないので、僅かな遅延がある。  
コックピット内は足、手を覆うようにコンソールがあり、各部位の筋肉の電位信号を読み取りその動きに合わせて動くようになっている。  
装甲に見える部分が花に見えるためそう呼ばれる。  
25年前に機体で飛来した機体の一機を元に設計されており、基本性能は構造上すべて同じであるがそれぞれ現地の状況や武装の好みにより多少はカスタマイズされている。  
各部にサブアームがある。  
コックピットは腰の後ろ。  
対人用にビームバルカン、対物用にグレネード、ロケットがある。  
但し、マイス用には使えない。  
ミサイルはない。ロックが出来ない。  
同じメーカーなので全て基本は同じ。  
外燃機関でバッテリーはない。  
但し、外付けエネルギーバックはあり。  
フレームも装甲もない。  
そう思えるのはエネルギー発生装置となる。  
素材はチキン質のプラスチック類のものである。  
バリアで守る。  
近接武装はパイルバンカーの類。つまり槍。  
剣はあるが防御用で攻撃用の大型のものではない。  
移動は高速艇やバス、運搬フローター使用する。  
バスは100Km前後で駅を介して都市を移動する。  
高速艇はクォンターが使用するもので、時速200Km以上を出す空艇である。  
機体の整備、格納のほかスライトルーム並の居住区があり自動運転となる。  
大容量で運搬も普通に行えるため、都市間の物資配達を副業とする者も多い。

バリア。  
起動時に僅かな時間、並行世界へ転送出来る状態になる。  
この時、周辺に歪みが発生しあらゆるものを弾く。  
転移している状態では実際にいるのは空蟬のみとなり、攻撃はすべて無効化される。  
機体にダメージを与えるためには、直に触れるか転移している次元まで追跡できる武器を使用するか、転移した次元に干渉できないようにするかしかない。

複合体。  
国と連邦の間にあり、軍事を司る。  
複合体はクエンター（庭師という意味）を組織し、世界の特異点に関する任務部隊の選別を行っている（表向きは各国のパワーバランス維持）  
その下に組織がある。  
世界の消滅の危機にある中、特異点と呼ばれる機体が回収され保有と研究、そして回収の為別世界から組織が介入してくる懸念があった。  
複数の問題を解決するために国家の上位組織として作られた。  
以後はマイスの開発、製造、搭乗者の管理を行っている。  
国は複合体に介入できず、複合体は国の政に干渉しない。  
それを不服として強国の一つが反乱し、独自に機体を作った。  
機体は複合体以外生産は禁止されている。各国は複合体から買っている。  
複合体の拠点は各国の主要都市にあり、国は干渉できない。

ガルキア連邦。  
南米方面、我々の世界のブラジル東部からベネズエラまでの領土を持つ国家連邦。  
各県から構成される南米2大強国の一つ。  
絶対王政で政治は全て王族が取り仕切る。  
王族の決定は絶対であり、格差が大きい。首都圏になると顕著だが、影響の少ない地方ではさほどではなく、意識していない箇所もある。  
首都はゼルフアン。王都と呼ばれる。  
王族の職分は引退時に後継を指名する必要がある。  
前の王は3年前に死亡したため、娘が14歳にして即位し取り仕切っている。  
摂政がいるが、最終決定は王が行う。  
30年前に回収した機体を解体、解析しており複合体を組織するきっかけを生んだ。  
その成果から基礎データは全て、首都にある血の刻印により封じている。よって王族以外に生の機体の一部とデータを見る事は出来ない。  
複合体とともに神の棺計画に関わっていたが先鋭化を理由にたもとを分かち。

以後、機体のパイロットの記憶と遺伝子をコピーしたクローンと、データを元にした新型機を開発していた。複合体は最終目標が同じならばと黙認していたが、次第に目的が自らの利権の拡大と、技術の終着点に到達するというエゴイズムへと変化する。成果物が脅威であり、その技術を手に入れたいという欲望と焦りから中立都市の制圧と成果物奪取を目論むも、血の刻印により解除できず、さらに目的が明らかになるにつれ複合体と敵対する。奪還作戦にて中立と市が消滅した後、更に立場が危うくなり、王都へ侵入を許す。新型機で応戦するも、機体は鹵獲され王女は反逆罪で逮捕される。更に研究施設も複合体に押収され、政治は全て連邦政府へと移行する。通貨はエア。但しスプレア側の通貨も利用できる。主産業は薬剤などの化学生成。

スプレア。

2大強国の一つ。

南米方面、ブラジル南部からアルゼンチンまでを統括する。

州制を取っており、各区域は独立行政区になっている。

立憲君主制で、君主はいるがほぼ政治に参加できない。

議会制で、州の代表が集まる議会により基礎的な法律が運営されている。

但し民主制ではなく、議員は国家に寄与した貴族より選ばれる。

その為に小回りが効かず、地方と中央との差が激しい。

首都はファルファバード。

連邦や複合体への出資は多大であるものの、強国ゆえの義務と捉えている。

各州ごとに複合体より機体が確保、適正数を配備している。

治安は安定しているが、地方ではそうでもないが為に半ば夜警国家になっている箇所もある。

半ば自立しているため外交に対して静観を決めることが多く、介入を避けていると言われているがそのことが他国にとって不気味さを出している。

自国領土内において封印の地が存在するが、実質的には複合体が管理しているうえ国境付近である地理上、クッションを置くため

治外法権となっている。

ガルキアが一方向的に領土の保有を示唆しており、実効支配をしている。

スプレア軍は対抗措置として複合体への重課金を要請している。

通貨単位はバル。但しガルキア側の通貨も補助通貨として使用可能。

主産業は工業と豊富な地下資源取引。

クエンター。

「庭師」の意味を持つ傭兵。

総じてマイスの搭乗者全体を指す。

大きく分けて複合体に属する傭兵と国家に属する近衛兵の2つがあり、両者ともに複合体に登録されている。

国家に属するタイプは王族に属した階級で非常に位や待遇が良い。

ただし条約で各都市圏に12機のみしか配備できないので倍率は高い。

対して傭兵は国家に属さず出入りも自由、各国家の法律が適用されない等の特権を持つが基本的人権は全て複合体に預けられる。

故に自分の身は自分で守らねばならず、国家での待遇も低い関係上、複合体拠点ををめぐらとするのが常である。

マイスの構造上、全て成人の男性のみで構成される。

消耗率の高さから過去の経歴は問われず、紹介や実績さえあれば簡単に登録される。

裏を返せば一切の経歴は抹消される。(何処の国家の何者なのかさえわからなくなり、事実上死者と同じ扱いになる)

このような制度が由来上上がった理由として、複合体の理念が「特異点関連の事象に当たる事」であり、それに見合う尖兵が必要であったためである。

血の刻印。

一般的に言えば「封印」のセキュリティ強化をしたもので、マイスの技術を応用したもの。

名前とことなり特定の因子を持つ人間(契約した人間)の記憶と遺伝子を記憶する装置と、照合して解除する装置の2つでワン

セットとなる。

一度認証すれば封印を解除しない限り再登録は出来ず、その人物がその場所に存在しない限り、永久に解除出来ない。

特定した領域に特定のものを封じる技術で、封じたものに時間の経過はない。

異次元に封じているとされているが、それすらもわかっておらず一般的には次元の歪みの僅かなスペースに放り込んでいると言

われる。

強力な為、保有しているのは各国家の中核のみ。

よって、知らない人間のほうが圧倒的に多い。

最重要気密を封じているのが一般的で、王族の認可がなければ解除できないようになっている。

リウエでは主人公が契約をしているため彼以外に開けられず、奪還作戦のときに解除され。内部の天使砲を回収する。

ガルキアではオリジナルの機体の部品と搭乗者の記憶データ、遺伝子データを保管している。

天使砲。

リウエで作っていた成果物。

複合体の立案で、25年にわたり開発が行われてきた。

一定範囲内にある世界の精神界、物質界を分散させて吹き飛ばす。

対消滅なので防ぎようがなく、指定された範囲に存在するものは文字通り「世界から消滅」する。(厳密には周辺世界から物質と

精神体を分離させ、次元回廊に封じる)

更にその領域はメインストリームに近い側に持っていかれる。

エネルギーの消耗が激しく、現時点では自身のエネルギーバックの供給なくしては撃てない。

発射するのは領域の中心を示すマーカーである。

余りにも非人道的なので発射時、敵味方の区別なく警告が発せられる。

本来は特異点を次元回廊に吹き飛ばす際に使用することになっている。

リウエ奪還作戦にて死体等を辱めず弔う為に使用し、2度目は自衛軍の先遣隊に対して使用した。

その直後に激高したオリジナルの機体により撃破される。

元々はオリジナルの機体に使われていた平行世界の移動技術を応用したもの。

立案時点では平行世界を完全に移動できるだけの技術は解析できなかったため、物質界と精神界に分離して次元回廊に封じるとい

う形で開発された。

主人公と長の2名による血の刻印にて封じられている。

次元回廊。

平行世界と平行世界の間には空隙があり、この部分は無が広がっている。

無の空隙を次元回廊と呼ぶ。

世界は2つの事象「物質界」と「精神界」が混ざること存在する(例えば生物が死ぬと、物質界と精神界が分離する。物質界は

残り他の物質と溶け込み、精神界は中間の次元回廊に飛ぶ)が、次元回廊ではどちらかしか存在できず、逆に混ざっている状態

では次元回廊に存在できない。

血の刻印は一時的に分離を行い、一定の座標で元の状態に混ぜる方法で行っている。そのため無機質でなければ血の刻印は出来

ない。

また、平行世界間の移動は無の空隙を裂いて行っている。(空隙を切れば物質界、精神界が別れなくても良い無になるので、その

部分が閉じる前に中和しながら進んでいけばよい)

この方法が確立する前は、血の刻印と同じく、分離して別個に平行世界に運ぶ方法を理論として取っていた。

再生計画。

ガルキアが発動した計画。

当初は世界秩序のための兵器開発であり、複合体も同じ計画を発動させていた。しかし、一般化による拡散を求めた複合体と先鋭化を求めたガルキア側が対立、袂を分かつ。複合体は一般化していく方法でならしたが、ガルキアはクローン兵と独自開発した高性能機による制御をもって世界の維持を行おうとした。クローン兵という、専門の兵士を量産する事で民に犠牲を与えずに事を収められると考えていたのである。目的は神の棺計画と同じだったが、複合体からの開放と領土拡大を目的に代わっていった。更に技術者のエゴにとらわれてしまい、独自開発した兵器とクローン兵を使い、リウエ制圧を行い更なる技術を手に入れようとした。それらは世界を守る為という複合体の趣旨に反する行為だったため、手痛い代償を支払う羽目となってしまった。王都制圧を持って完全に沈黙し、王女の逮捕で幕を下ろす。以後はマルスを除くクローン兵は処分され、独自開発された兵器は鹵獲、改造される。

神の棺計画。

回収した2機の特異点を維持するための計画で、次元回廊に永久封印する事でメインストリーム内に世界を置くことを目的とする。特異点と次元回廊に封じるための兵器により構成される。27年前の会議で計画が決定づけられ、その間の不測の事態への対処などから複合体、成果物が危険すぎるため、機密保持と技術流出を阻止するためにリウエが設立された。

成果物の兵器はどの勢力が回収してもよいことになっていて、回収後直ちに消滅させるよう通達されている。

目的が達成できるのであれば、どの勢力でも成果物を回収してもよいという事になっていた。

その際、リウエに出入りする外の人間は機密処理の対象となっていないので通達を出すことになっていた。しかし、通達が機密処理に係るものではなかったため、不審を抱かせる事になり、マルスが途中で引き返す理由になった。

誰がいつ開放するかはリウエの長が決めていた。これは複合体にも話していない為、だれがカギになっているのかわからない状態だった。

これはリウエが自分達を終わらせるタイミングを「自分達で決める＝最後の独立権行使」となっていたためである。

血の刻印は最も信頼を受けていたクワンターに保有させていたが、当人と関係者以外誰も知らなかった。

名前：アラン＝グレイザル

容姿：赤い髪にサングラスをしている。(実際には黒髪に黒い瞳)。

能力、特技：カード認証無しでマイスに搭乗できる。刀を攻撃に使用する。

年齢：21。

性別：男性。

性格：

(思考) 情に厚く、理性を通り越して感情面を優先する。しかし戦闘は冷徹で何者も容赦はない。クワンターとして合理的であり、状況に応じて2面性を使い分けているが、完全ではない。

(行動) 自分の居場所や絆にこだわりがあり、約束の為であれば依頼だろうが何だろうが放棄することを平然とやる。

但し直の殺しを過剰に嫌い、死体等に強い嫌悪感を示す。コックピットを仕留めるのも死体を見ないように機械部品に紛れ込ませるためである。

(感情) 遇の悪いクワンターとして生活し続けたために余り話そうとせず、人を避ける傾向がある。誰に対しても同じに接するが、相手にとって不快に感じる事が多く、相手もあまり付き合おうとしない。

職業、所属：複合体直属クワンター。

自称：俺

二人称：アラン、クワンター。

総評：他人を疑ってかかるが厄介事は好まない。人づきあいが苦手なのではなく、過去に利用し利用される関係に慣れすぎてしまっているためである。しかし、信頼を築けば絶対に裏切らない傭兵の思考を持っている。また、リウエの人々と交わした約束である「安寧」を果たす為に行動する点では一貫している。自分の居場所の安寧の為であれば自らを捨て石にすることもためらわれない。自分が何をなすべきか、その役割を分かっていたうえで演じているともいえる。

主役か脇役か：主役。

目的：自分の居場所に安寧を取り戻すこと。

プロフィール(各項目を200字以内にまとめる)

(過去、行動動機)：

30年前に落ちた機体と死亡したパイロットの記憶と遺伝子を移植されたクローン。

研究都市で兵器として育成された実験体の1人だが、兵器としてあるまじき「死の恐怖」に目覚めたために廃棄処分されかけるが、複合体とたもとを分かち証拠として、技術共有を目的に複合体に明け渡される。

道具として使われ続けた為、人を信用できなくなる。

リウエ中流が決まったのも、扱いに困っていたためだが戦果に優れていた為、複合体の特殊な依頼に駆り出されることが多くなる。些細な依頼も受けていた為、リウエの人間から信頼され血の刻印を受ける。

(現在、行動内容)：リウエから離れた際に襲撃を受けた知らせを受け、依頼を蹴って急行し、機体を撃退して調査する。

回収した機体の部品を複合体に届けると同時に、(表向き)依頼を蹴った理由を説明するため召喚される。

奪還作戦では天使砲の使い手として選ばれ、王都侵攻時に自分の過去と向き合っていく。

様々な任務を経験した後、最後は自分のオリジナルと因縁を持つ女性と出会う。

(未来、行動結果)：彼女の機体を敵とみなして緑色閃光を起動、共に次元回廊へ封じる。

(物語上での)役割、分類：1部主人公。

モデル、モチーフ：

備考：

ナルオンでは黒い髪、黒い瞳は遺伝子上存在しない。彼は本来世界に存在してはならない意味合いがあり、差別を受ける為神を染めサングラスをして素性を隠している。

闘争本能を上げつつ遺伝子混濁を防ぐため、生まれながらにして去勢されている。

虹彩にクローンの製造ナンバーが埋め込まれている。

複合体直轄の人間であり機密に関する内容や汚れ仕事が多い為に記録がほとんど抹消されている。

更にリウエに駐留していることもあり、ろくな仕事をしない低ランクのクワンターと認識されている。

実験のため、オリジナルが持っていた死の恐怖を植え込まれる。

そのために直接的な殺生を嫌う。

名前：ルシエラ＝ウォルト

容姿：青色の髪を纏めている。

能力、行動力があり、動揺が少ない。

年齢：16。

性別：女性。

性格：

(思考) 育った環境から現場主義な側面があり下層の人間に同情的である。

(行動) 理性より感情が先に出る。自分とその身内を優先しがちでクワンターや周囲の状況が見えていない面がある。意外にも身内意外に感情は出さず、冷静を装う面があるが、実際の所信頼がないので演じているだけである。

(感情) 年齢相応の血の気の多さ、感情を表に出しやすいが嘘はつかない。

職業、所属：複合体幹部。

自称：あたし。

二人称：ルシエ。ルシエラ。

総評：物事について納得できるまで追求する。そのためにはどんな手段も厭わない。多感で地位に恵まれ、人を見捨てることはない。しかし、複合体幹部らしく信頼は自分と自分が得をする人間に限られ、杓子定規にとらわれやすい。人を疑う人間には無意識

に冷たい態度をとる。

主役か脇役か：主役。

目的：婚約者の仇をとる事。

プロフィール（各項目を200字以内にまとめる）

（過去、行動動機）：複合体統括者の血縁に生まれるも、堅苦しい環境に馴染めず学園都市を経由してリウエで過ごす。その時にハンスと知り合い、婚約者となる。複合体の人間であるがために僅かであるが実態を把握しており、彼らに対して思い入れが出来る一方、クァンターに対しては戦争屋としていい印象はない。

リウエにてハンスと会い、打ち合わせを行っていた時に襲撃に合う。民間人の非難を的確に行う。

（現在、行動内容）：リウエ占拠に不快感を示し、婚約者を殺したとして責め、事情を聞き取って主人公に代わりデータをとる。複合体に会い奪還作戦の中核をなす他、自身の領土が占拠された時には慌てず、議会を持って奪還作戦のあらましを了承して作戦を複合体に提案する等、冷静な対応を行うまでに成長する。自分の領土を制圧されたにもかかわらず、戦争は交渉が基本としてガルキアの女王と共に無条件撤退の交渉に応じている等、感情に動かされなくなった。

（未来、行動結果）：ガラム亡き後、リウエに慰霊碑を立てて合体の幹部としての位置に収まる。傭兵部隊の現場指揮を請け負う。

（物語上での）役割、分類：1部ヒロイン、もう一人の主人公。

モデル、モチーフ：

備考：複合体の関係者である事を隠すため、ルキアという偽名で登録、行動している。

名前：ハンス＝アリアント

容姿：緑色の髪をした細目。

能力、特技：マイスの舞台を統括する。

年齢：24。

性別：男性。

性格：

（思考）優しく細かい気遣いのできる人間であるが、プライドと空気の読めなさからプライベートと仕事の違いがわかっていない。公私混同が著しい。

（行動）本人も前でも、平然と酷評するなど空気が読めない。マニュアル通りの展開を行うも、しょせんマニュアル通りなので対処できない事態に慌てやすい。しかし、実直な戦闘は教える側についていたために来る癖であり、クァンターとして多大な戦果を上げているのもまた事実である

他者を優先するあまり、自分を見失う事が多い。周りから心配されている。

（感情）外の経験がなく、肩書によりプライドの高さが磨かれているので外の人間を見下しているきらいがある。

職業、所属：リウエ駐留クァンター統括部長。

自称：俺。

二人称：部長、ハンス。

総評：はた目からすればただのロリコン。空気の読めない男である。しかしながらその言動、行動は他者を思いやっており誰に対しても平等だとすぐにわかる。但し人を見下す面があり現地の民間人には腕が立つが受けが悪いと評される。

主役か脇役か：脇役。

目的：リウエの防衛。

プロフィール（各項目を200字以内にまとめる）

（過去、行動動機）：ガルキアの平民で、クァンターとして訓練を積んで成り上がってきた。努力で上がってきた人間であり、他人の力を借りなかった為に人を信じたいという感情と、プライドの高さにより人を信じない感情の2つが相反する性格となっている。リウエ駐留の際、ルシエラと知り合い意気投合、地位の違いから周囲に反対するも婚約をする。

（現在、行動内容）：リウエ襲撃の際、優先して出撃する。アランがいない状況に苛立ちながら迎撃に入るが統制が取れず、性能も劣っている状態では勝ち目がなく、打ち取られる。

（未来、行動結果）：打ち取られ機体は大破、死亡が確認される。

（物語上での役割）：主人公の上司。主人公との鏡。部隊長。

モデル、モチーフ：

備考：やられ役と言う訳ではない。相性が悪かっただけである。クァンターとしての力量はかなりのもので、新型機をある程度まで追い詰める。また彼の死を知った時、アランは彼ほどの人間が敗れるのかと驚愕していた。（演習ではアラン以外に負けはなく、それも相性によるものとされる）

名前：ヴァンブレイス＝ロー＝スプレア。

容姿：ひげをはやしている。痩せ型のビジネスマン風。髪の色は紫色。

能力、特技：判断、理解力に優れる。

年齢：45。

性別：男性。

性格：

（思考）人は自律するものと考えており、任せられるものは他人に任せてしまう。しかし放任主義ではなく最終決定は自分で行うようにしている。表立った野心は特になく、それぞれがそれぞれ上手くやっていたらそれで良いというスタンスである。

（行動）王族らしからぬフランクな態度を取り、回りにもプライベートの時にはタメ口を取るように話しているが、公のときには態度を注意する等、仕事とは完全に分けて考えている。

（感情）ひょうひょうとしていて常に笑みを絶やさない。これは他人と接客するときの態度であり、相手から確実に情報を引き出す時の手段である。気づいた時には騙されたと感じるが、同時に内なるものを吐き出したとして相手は満足する。

職業、所属：スプレア皇帝。

自称：俺。

二人称：皇帝、ヴァンプ。

総評：すべてにおいて抜けない男である。人の上に立つ人間ではないと考えるが、話せば納得する。冷静な判断もこなせる等、余りにも完璧な判断を行うために周りから扱いにくい人間とされる。実際の所、現在の状況しか判断していないので未来に疎く、興味のないことには何も知らない世間知らずである。余計な知識は持ち合わせない人間である。

主役か脇役か：主役。

目的：領土の安定化。

プロフィール（各項目を200字以内にまとめる）

（過去、行動動機）：20歳に皇帝が死亡した為に即位した。何をすることも家来に許可を取らなければならなかった反動から、些細な事は他人に許可を出させるより自分で行かせた方が早いと考えるようになる。議会制等の決定も適当に見られている。

（現在、行動内容）：リウエ占拠に不快感を示し、（表向き依頼を蹴った制裁として）主人公達を複合体を介して召喚する。複合体に奪還作戦を立案し、中核をなす。自身の領土が占拠された時には慌てずに議会を持って奪還作戦のあらましを了承し、作戦を複合体に提案する等、基本的に規則を重視し話を聞いて判断するタイプである。戦争は交渉が基本としてガルキアの女王と共に無条件撤退の交渉に応じている等、感情に動かされない面がある。

（未来、行動結果）：スプレアの領土を安定させると同時に、ガルキアの一部の統治権を持つ。

（物語上での）役割、分類：スプレア領統治者。主人公たちの理解者にして親。

モデル、モチーフ：

備考：

名前：アリッサ＝ナル。

容姿：短い青の髪。相応のスーツを着ている。目を隠して、従者が常についている。（盲目）。全てを隠すため仮面をかぶっている

能力、特技：目を失っても感受性が強く、見えているかのように判断できる。

年齢：30代後半。



性別：女性。

性格：

(思考) 柔軟な思考を持つが過去には無謀な面があった。それゆえに盲目となる。現在でも無謀、武闘派な部分がある。

(行動) 意外に武闘派で、従者ともども武装している。立場相応の胎教的な行動をとる事が多いが、矢鱈にクワンターを目の敵にしていて、ルシエラの婚約について不幸になる結果を話し、愚かさを論じた。

(感情) クワンターに厳しい態度をとり、笑みを見せる事は一切ない。表情が曇りがちだが本来の優しい性格を隠すためである。

職業、所属：複合体前線統括者。

自称：私。俺。

二人称：統括、アリサ。

総評：他人に厳しく、非情な判断を下しがちになる。彼女は世界を救うという使命にとらわれるあまり、自分を見失い純粋なコマを演じているに過ぎない。本来は相応の生き方をした普通の人間である。

主役か脇役か：主役。

目的：複合体の維持、世界の安定。

プロフィール(各項目を200字以内にまとめる)

(過去、行動動機)：25年前に設立された複合体の血縁者である。

元々はガルキアの王族でありクワンターと夫婦になったが、国家の小競り合いにて失う。敵討ちとしてマイスに乗り込むも、女性で記憶の差異があった為に視神経を失う。以後クワンターになれない事実を痛感し、地位を降りて複合体に入る。

取引により手に入れたマルスを複合体の拡大と共に育てた。ガルキアの計画の一端を知っていたが、世界を救うためであると信じ無視していた。マルスを封印の地に向かわせたのは彼女であり、依頼を放棄した理由を問うために召喚した。

(現在、行動内容)：占拠後ガルキアの真意を知るやいなや、スプレア皇帝と会談し侵攻命令を発動させる。依頼の放棄にペナルティを与えうえて調査に向かわせた。

(未来、行動結果)：複合体としての使命は続くも、設立された国家連合の管理下に入る。それでもクワンター達の管理が必要になるため、立場は維持している。

(物語上での)役割、分類：主人公達の母親。

モデル、モチーフ：ステイプ=ジョブス。

備考：盲目は治せるが、彼女は過去の制裁からあえてそのままにしている。マルスは夫と彼女にとって子も同然であり、形見として見ているらしいがある。

名前：ハイン=コル=ガルキア

容姿：ロングスカートの胸のはだけたドレス風の衣装、ピンク色のストレートの髪。

能力、特技：

年齢：14。

性別：女性。

性格：

(思考) 年齢相応の純粋さに染まっていて、全ての人間を救いたいという甘い思想にとらわれている。余りに世間知らずな面がある。

(行動) すべてを救うため、民の為と私を捨ててささげている。

(感情) 半面感受性の強い性格には無理があり、ガタが着始めている。

職業、所属：ガルキア女王。

自称：私。

二人称：女王。

総評：使命感が強く、王族と貴族の地位を保とうと保守的な思想に翻弄されている。担ぎ上げられ計画の引き継ぎを余儀なくされた彼女の心は余りに窮屈で悲鳴を上げているが、理性と使命でふさぎ込み保守的な政治を粛々と行う為政者を演じている。その姿は見るものから見ればすぐにわかるが、誰もが口出しをしない。

主役か脇役か：脇役。

目的：虐げられている民を利権と領土拡大で救う。

プロフィール(各項目を200字以内にまとめる)

(過去、行動動機)：前代の王と貴族の王妃の間に生まれる。生まれた頃より徹底的な帝王学を学ぶが、その生き方は大抵の少女が友人や恋愛などを経験して心の穴を埋めていくのと異なっていた。結果、心の穴を埋められず空虚なまま育っていった。更に才能を持っていると周囲に評されたのも災いした。王は病を理由に引退し、自動的に王の立場に就いた時、引き継がれた人道から外れた計画を見て呆然となる。しかし複合体からの独立が虐げられている民のためになると信じて計画を続投し、他人に言われるがままに政治を行っていた。

(現在、行動内容)：リウエで開発している兵器が自分達、特に民に向けられるのでは、という恐怖から先手を取り制圧作戦を開始する。計画の一端で独自に開発したマイスで占領するが、皮肉にも自分の国で作ったクローンの一人であるマルスによって瓦解していく。

責任を問われ、話そうとするが摂政は拒絶。これにより計画の調査を目的とした王都侵攻作戦が発動される。

平民を盾にして保身を図る貴族や、率先してスプレアに下る王族を見て自分達のかしてきた事は幸福ではなく、ただの保身と権力の拡大だった事に気づくも、アイデンティティを折らない為に民のためだと言い聞かせる。王都を制圧されマルスに責任を問われた時、彼女の心は完全に折れる。そして条約違反として逮捕、彼女の証言により計画が表に出る。王族や貴族共々複合体に軟禁される。

(未来、行動結果)：軟禁後、王都にある血の刻印により封じられたオリジナルの機体の部品とデータを取り出すため、取引を持ちかけられる。保身に嫌気が差すも、安寧を取り戻すために自分の戦いをするよう諭される。取引に応じ釈放され、血の刻印を解除する。権力の殆どを剥奪されながらも、ガルキアの女王として君臨し無条件撤退の交渉に望む。

(物語上での)役割、分類：全ての元凶。

モデル、モチーフ：

備考：いかにもお姫様じみた人。

## ■マイス(ロボット)

機体：リアラ=グルバス

アランが複合体と共に開発、設計した専用のマイス。「リマル」はマルス専用という意味で、システム等からマルスに適合するよう設計されている。ただし整備の問題から部品自体は規格化されていて、共有出来るようになっている。

10m前後、ベージュを基調としている。

機体性能はそこまで高くはないが、彼自身が機体性能を極限まで高められる事もあり、非常に性能が高く見える。

特筆する点として、防御用に使う短刀(マン・ゴージュ)を攻撃に転用した長刀の武器(ドウダヌキ)と、対マイス用の飛び道具、ボウガンを搭載している点がある。

通常、バリアを突破するためにはエネルギーの問題から一転集中の突系の武器を使用し、更に次元転移を行うマイスに飛び道具は通じない。

しかし次元転移先の座標を計算し、追尾するように弾頭をプログラムして発射する(但し効果は0.8秒くらいしかない)矢を放つボウガンが作られた事で中距離での有用性が高まっている。

また、刀は表面積の過大さからエネルギーを消費しやすいために採用を見合わせていたがマルスはこれを採用し、刀自体に外燃機関を搭載したことで解決した。但し刀自体が大型で取り回しは悪い。

また各種ハードポイントがあり、各種武装と組み合わせられるようになっている。

非常に強力な機体とされていたが、王と奪還作戦で新型機ヴァルク=ガインの統制の前に苦戦する。統制の裏をかいて相打ちという形で撃破され、彼自身はヴァルク=ガインを鹵獲する。

武装：対人用エネルギー機銃、対物用グレネード及びブスモークディスチャージャー、長刀(ドウダヌキ)、防御用担当(マン・ゴージュ)、腕部パイルバンカー、予備ラッチ、天使砲(追加)



機体：ヴァルク＝ガイン

ガルキアが独自開発した新鋭機。設計思想は集団戦闘をメインとしており、各々の役割別にカスタマイズが施されている（パイロットの特性ではなく戦術上の役割で異なる）。

「ヴァルク」は防衛を意味しており、役割ごとにナンバーが振られている。

搭乗者は芦原のクローンである為、機能性は非常に高い。

機体の単体性能も高く、リウエに向かったリマル＝グルパスを中破に追い込んだ（但し腕を破壊されている）。

この機体の真価は徹底した統制であり、文字通り数の集まりでしかないクォーターを確実に追い込み撃破していく。

しかし、逆を言えば統制を取る為のコントロール役を破壊してしまえば統制は不可能である。更にクローン自体は劣勢に追い込まれた際の融通が利かない。（そういう訓練を受けておらず、死の恐怖や感受性がないので生き延びる＝仲間を助ける選択肢がなく、足手まといは味方でも容赦なく足切りにする）マルスは統制を行う機体をフォーメーションと通信ネットワークのハッキングで解析し、統制を行っている機体を見抜き、相打ちに持ち込む形で撃破する。

以後はその場で強奪し、武器を持ち出した。

マルスが奪ったのはコントロールを行う統制用の機体で指令や通信系統が強化されているが、通信を阻害するスモークディスチャージャーなどの自衛武装はない。

ハードポイントによる拡張性があるが、規格化されていないので共通性はない。

王都制圧後、複合体に接収され規格化される回収を受ける。その後マルスに供給された。

武装：対人用エネルギー機銃、パイルバンカー、防御刀（マン・ゴーシュ）

通信用アンテナ、

ナルゲム

リウエ駐留部隊に配備されている機体。

他のミスに比べて基本性能が高めになっている。

これは独立部隊で保護する必要があるため。

武装面は規格化しているので特に何かあるわけではない。

各々のマーキングがあり、完全な専用機となっている。

但しソフトウェア段階での調整は一切ない。

ハンス専用の物は通信系統が強化されており、リハス＝ナルゲムと呼称されている。

侵略時に出撃して肉薄したものの、統制により撃破されていく。

対人用エネルギー機銃、パイルバンカー、防御刀（マン・ゴーシュ）